

日本産業衛生学会東海地方会

地方会ニュース

発行所 日本産業衛生学会東海地方会
 〒470 - 11
 愛知県豊明市沓掛町田楽ヶ窪 1-98
 藤田学園保健衛生大学医学部公衆衛生
 学教室内 電話 (0562) 93 - 2453
 発行責任者 島 正吾

(題字 皿井 進筆)



ひとつの掛け橋

— 地方会ニュース創刊 5 周年を迎えて —



日本産業衛生学会東海地方会事業部長 岩井 淳

昭和59年9月、地方会活動に一つの新風を吹き込もうと島正吾会長の新体制のもと、第1号が発刊されて早くも5年を迎えることとなりました。地方会の行事として、会員諸氏に何かメリットをフィードバックしたいと、そんな新機軸をねらったの企画で

もお願いしてまいりました。内容も地方会関係だけではなく、現在の産業医学全般にわたる新しい情報をできるだけのせていきたいと意欲だけは十分なのですが、多忙な編集委員諸氏にとってはなかなかたいへんなことです。しかし「速報性」は何にもまして重要なことですので、最新の情報はできるだけ時期を失ないように掲載に努力しています。

した。当初は、森川総務部長を中心に編集メンバーも何人か指名されて、創刊号の発行作業が進んでおりますうちに、この行事は総務部よりもむしろ事業部の方がふさわしいのではないかとということになって、事業部が現在編集発行を担当しております。

当地方会の会員数の推移を眺めてみますと、現在496名で、これは昭和59年創刊号発刊当時の310名とくらべますと1.6倍にあたります。会員数の増加ということも地方会活動活性化のひとつの現れと考えれば、それなりの成果はあったものと思っています。

今、上の写真の15号分を眺めてみますと、色々と苦勞したことが思い出されますが、なんとかここまで続けてこられたのは島会長はじめ編集委員、執筆者ならびに会員諸氏の、絶大ご援助とご協力の賜物というほかありません。

近代産業において、労働衛生の占める役割は益々増大しつつあります。産業医学という学問と健康管理という公衆衛生的実践活動とは、労働衛生の分野においては車の両輪のようなものでありまして、大学、研究所、産業現場はいうまでもなく、産業医、産業看護職、衛生管理者、衛生工学・環境管理等コメディカル専門スタッフの密接な協力がなによりも必要です。本「地方会ニュース」がこれらの分野、これらの人たちに対するひとつの掛け橋となってくれれば、我々、これ以上の喜びはありません。

どんなことでもそうだと思うのですが、ひとつのパターンができあがってきますと、やはりマンネリ化してきます。毎回、編集委員の方々にいろいろとご意見等をお伺いしながら「特集」を組み、できるだけ会員の全部の人たちに参加してもらるように原稿執筆等

特集 1 東海地方会ニュース創刊 5 周年によせて

東海地方会長 島 正吾



この地方会ニュースは、岩井淳編集長以下多くの関係会員の熱意と努力によって、第15号をめたく突破したことを喜びとしたい。

本紙は毎号2000余部を全国規模で無料配布し、会員相互の連帯と親睦を深める中で、当初に企図した「待たれる情報紙」としての性格を次第に強めつつある。本紙が今後さらに、清新にして充実した紙面を会員に提供するよう、心から期待したい。

ただけるかに、もっとも腐心するところである。

その点、今春に東北地方会が担当した青森での第62回日本産業衛生学会・第46回日本産業医協議会の開催は、弘前大学教授白谷三郎学会長の多大な御尽力に負うものであるが、当地方会員に極めて有意義なものとなった。例えば、今度の学会には東北地方会員の39%の人が出席し、ほかに当日会員が46名、また特別研修会には132名の参加を得ている。

例年、当地方会では各県の医科系大学が持回りで、秋に学会を1回開催するのみで、今回の総会ほどの出席率は到底望めなかった。

ほかに、今年から東海地方会にあやかり東北地方会ニュース「みちのく」を刊行しはじめています。こんな形で東海地方会ニュースは東北地方会にも大きな励ましを与えていることを付言し感謝する次第である。

東海地方会ニュース発刊 5 周年をお祝いして

北海道地方会長 斎藤 和雄 (北大・医・衛生)



日本産業衛生学会東海地方会ニュース創刊 5 周年を心からお祝い申し上げます。

実のりある地方会活動をいかに進めて行くかは、どの地方会でも真剣に考えていると思います。地方会活動の一端として地方会ニュースを発行することは、会員相互の理解を深め、産業衛生活動推進のための情報交換の場として極めて有意義なことと思います。

北海道地方会では、昭和12年7月北海道産業衛生協会が、井上善十郎教授を初代会長として発足した。その時機関誌として北海道産業衛生協会会誌を刊行した。この会誌は北海道地方における産業衛生研究の成果や地方会ニュースを掲載し、その役割を十分に果しその意義は極めて大きかった。昭和16年4月、協会の名称が北方産業衛生協会と改められたのを機に、北方産業衛生協会会誌と名称が変わった。改名の意味は北海道のみではなく広く樺太と千島の産業衛生を包含するためであった。しかし、昭和18年10月第6号を後に戦時体制となり、休刊の止むなきに至り、昭和30年9月第7号の復刊まで、12年間の歳月を要した。復刊号から「北方産業衛生」と改め、本年3月第37号を刊行し現在に至っている。このように紆余曲折はあったが、北方産業衛生は我が国固有の領土である樺太、千島の帰還の願いも含めて、発刊を継続している。

ニュースや機関誌の発行は地方会活動の年次のしめくりとしても大変意義のあることであり、貴地方会ニュースの永続的発刊と益々の発展を願って止みません。

学会員のコミュニケーションの充実と地方会活動の活性化

関東地方会会長 高田 昶 (北里大・医・衛生 公衆衛生)



関東地方会は会員数約2,300名にもおぼり、その主たる活動は年4回開催される地方会例会である。特に夏季には産業技術の進展と産業衛生上の課題を勉強するため工場見学会を兼ねた1泊例会を行い、深夜までの討議を通じて会員相互の親睦と知識の交換を深めている。

昭和62年度・大正製薬(株)大宮工場、昭和63年度・川崎製鉄(株)千葉製鉄所、本年度は富士通(株)沼津工場の見学を予定している。本工場は東海地方に存在しているので、島 正吾東海地方会会長の特段の御理解、御協力を賜わり深謝申し上げる。

関東地方会は、大学・研究所・企業から36名の幹事を委嘱し、当番幹事が例会の運営に携わっている。また、関東地方会産業看護研究会、健康管理研究会も設置され、産業衛生学会法制度検討委員会にも関東地方会より数名の幹事がその委員として参加している。

本年12月9日(土)には第167回例会が東京医科大学病院に於て開催される。これは「日本産業衛生学会創立60周年記念」として「第23回中小企業衛生問題研究会全国集会」を併催することになっている。東海地方会会員の多数の御出席を得て盛大に開催したいと願っているところであり、今後とも関東地方会への御理解、御支援をお願い申し上げます。

北陸甲信越地方会の活動について

北陸甲信越地方会 野原 聖一 (金沢大・医・公衆衛生)



当地方会では毎年秋に地方会総会を北陸甲信越の6県持ちまわりで開催しており、その他常任理事会や理事会が定期的に持たれております。開催地へ行くのに一度東京に出た方が早く現地に着けるといふ地理的な不便さを伴う場合もあり、なかなか他県で地方会が開催される時には出席できないという会員が多く、いかに地方会の中でのコミュニケーションを図っていくか、活動性を高めていくかが重要な課題といえます。昭和59年、61年からそれぞれ発足をみた衛生管理者研究会、産業看護研究会は、前述のような事情もあり、北陸部会、甲信越部会と活動に便利ように地域部会制をとっております。これらは共通の問題意識をもつ職種の人達に勉強の場であるだけでなく格好の情報交換の場ともなっています。東海地方会のように地方会ニュースを刊行することも将来の希望としてありますが、発刊までにまだ解決すべき問題もあり、今のところ時々事務局からお知らせをするにとどめております。昭和33年10月に第1回の地方会が開催されて早や30年余経ちますが、昨年4月にはお

東北地方会の昨今

東北地方会会長 角田 文男 (岩手大・衛生 公衆衛生)



東北地方会は東北6県に所属する学会員で構成されるが、会員数は本年4月末現在で、147名と少ない。地方会事務局は、去年7月に東北大学池田正之教授の京都大学転出に伴う地方会長の改選の折に、岩手医科大学医学部衛生学公衆衛生学講座内に移転し、教室の学会員が庶務を担当している。

御存知のように、東北地方は面積が広く全国の18%を占める土地に約1千万人(全国人口の8%)が住んでいるが、仙台市以外には大都市もない。最近、企業側は規模を縮小し、その替りに数と種類とを急増させる傾向にある。そのため、産業医学管理は以前と違って専属産業医による企業が減少し、専ら嘱託産業医をもって賄おうとする現況にある。

従って、現在東北地方会としては、学会員の過半数(54%)を占める嘱託産業医に対して学会の最新情報を如何に伝え、応用してい

げさまではじめて北陸にて第61回日本産業衛生学会・第44回日本産業医協議会（会長岡田晃教授）が開催され、この地方の産業衛生の進展の賦活剤となりましたが、多岐にわたり地域の産業衛生に貢献するような研究・調査を今後一層推進することも地方会の役割と考えます。

創刊5周年を祝う

近畿地方会 堀口 俊一（大阪市立大・医・環境衛生）



貴地方会ニュースの創刊5周年を心からお慶び申し上げます。いつも送っていただくニュースを手にして、さすが組織力と経済力のある東海地方会だと感心し、敬服しております。いま既刊号を取り出して、故錫村満先生の油絵や俳画、井上俊先生のスケッチなどに改めて興味を惹かれました。私どもの近畿地方会でも、貴地方会ニュースにならって、何らかの定期的な刊行物の発行を持ちたいと提案していますが、言うは易しで、現状は総会や学会（近畿産業衛生学会）の案内を事務的に出すのがやっとというところなのです。

さてこの機会に私どもの近畿地方会の歴史と現状について簡単に紹介させていただきます。学会活動は昭和24年（1949）12月26日に第1回の「近畿労働衛生研究会」が開かれまして以来、昭和28年11月28日近畿地方会第1回集談会、その後昭和38年11月8日、第1回近畿産業衛生学会を経て、昨年の28回まで続いて現在に至っております。会員数は620名で、主な事業としては、毎年5月に開催される総会と秋の近畿産業衛生学会があげられます。総会では地方会事業計画や労働衛生に関する最近の話題等について会員の活発な意見交換がなされ、近畿産業衛生学会では例年20～25の演題発表が行われています。その他の事業としては研究会活動があり、研究会は現在12を数え、会員はそれぞれの専門分野に分れて研究交流を行っています。各研究会からの報告や労働衛生に関する情報は事務局（大阪市立大学医学部環境衛生学教室）に集められ、さきに述べましたように年3回「地方会のお知らせ」を発送し、会員への連絡を密にしています。

私事にわたりますが、貴地方会に招かれて、たしか原一郎教授と御一緒したと思いますが、口演発表の機会を与えられたことが思い出されました。そこで教室の記録を調べましたところ、もう30年も昔、昭和34年（1959）5月10日に「ビニール履物製造作業者のベンゼン中毒について、実態調査成績」と題して報告していることが分かりました。その後は久しく地方会間の交流の機会がないようですが、今後は何らかの方法でもう少し貴地方会との交流をはかりたいものだと思います。最後に創刊号から発行責任者であられる島正吾先生の労を謝し、このニュースの益々の御発展を祈念してお祝いの言葉とさせていただきます。

若い産業医の育成を

中国地方会 芳原 達也（山口大・医・公衆衛生）



日本産業衛生学会の中国地方会は、昭和33年に設立され、中国・四国合同産業衛生学会の発会式を山口医大で昭和33年1月19日に行なっています。それ以後、約30年にわたって、学会活動が行なわれています。元来、中国地方は気候風土が温暖で水に恵まれ、天災がほとんどありません。この理由から、明治以後の日本の近代化において、古くから多種多様な工場群がありました。また、戦後においては造船、鉄鋼、化学等を始めとする重化学工業から、繊維、雑貨、電気製品などの軽工業に至るまで多くの工場が立ち並んでおります。

このため、日本産業衛生学会の基礎ともいえる、倉敷の労働科学研究所や、その他、産業衛生活動も古くから行なわれてきました。そして、多くの優秀な産業医の先生方が御活躍になり、現在も御健闘

なさっております。しかし御高齢の方が多く、若手が少ないという逆ピラミッド型の産業医構成になり現在の所は何とか維持していますが、これから5年～10年後を考えると若手の産業医育成が急務と考えられます。又、最近ではファインケミカル、IC基盤、ポリプロ等々、新しい化学物質を使用したり作ったりする工場が続出して、瀬戸内工業地帯では、特にこの傾向が著しい感じがします。このため、産業医の育成もより専門的な毒性学及び、予防学を主体とした教育が必要と考えられます。

東海地方会ニュース満5周年を祝う

四国地方会長 三好 保（徳島大・医・公衆衛生）



毎回送られてくる日本産業衛生学会東海地方会ニュースを手にするたびに、四国地方会でも何とか地方会報を出したいものだと刺戟を受けておりました。東海地方会の地方会ニュースも既に15号を発刊し、満5年を迎えたとのこと、心からその精進の程に賛辞をお送り申し上げます。

り申し上げます。

四国地方会は御承知の通り、日本4島の中で最後まで離れ島の立場にありましたが、昨年4月に瀬戸大橋が開通し本州と結ばれました。このように日本の行政の中で最後に番の廻ってくる立場に常時放置されております。そのため産業構成の変化も遅れており、学会員の会員数の拡大も思うにまかせません。何よりも四国島内の道路整備の遅れが、4県の学会員相互の連絡交流にも大きな障害となり、隣県へ出掛けるよりも航空路のある東京へ出る方が遥かに便利だという矛盾を抱えています。しかし地方会活動としては、そうした矛盾を克服するために中国地方会と協同して合同の地方会総会を交互に開催しては四国地方会の活性化に努めるべく励んでおります。

一流企業といわれる規模の企業の進出が少ないので自然に産業医の数も少なく、相互のコミュニケーションがとりにくかったのですが、昨年秋にやっと四国地方会誌第1号を発刊できた状況です。貴地方会ニュースを範として、四国地方会の情報誌として会誌を育ててゆきたいと考えています。貴会ニュースの益々の充実発展を祈って筆をおきます。

重厚長大と軽薄短小の狭間

九州地方会長 石西 伸（九大・医・衛生）



九州地方会活動の源流は東海地方会と並んで古く、諸先輩による輝かしい業績の数々を鉦山衛生、精錬業衛生、造船業衛生、化繊工業衛生の分野でみることが出来ます。また最近では、エレクトロニクス産業、自動車産業、窯業など先端技術産業での著しい発展に目を

見張るばかりです。しかし、わが国におけるエネルギー革命および産業構造の変貌の中で、いわゆる重厚長大から軽薄短小へと変化するにつれ、未だ新しい産業分野における産業衛生関連領域の再編成が十分になされておらず、今後問題を残しています。

九州地方会としては、例年初夏に地方会学会を開催し、秋に健康管理研究会および産業看護研究会を開催し、産業衛生のレベルアップや会員間の親睦を計っています。特に研究会では、健康づくり運動や精神衛生問題をメイン課題に、企業による労働者の健康管理ならびに労働者自身による自己管理について啓蒙運動がなされています。このように作業環境管理より作業管理、特殊健診より一般健診中心の健康管理へと、その研究、実践の比重が推移しつつあります。

現在、九州における産業衛生史の編さんを企画中で、貴地方会のように立派なものを早くまとめたいと思っています。また平成2年春には、福岡にて日本衛生学会、熊本にて日本産業衛生学会を開催しますので、多数の皆様のお越しをお待ち致しております。

特集 2

平成元年度東海地方会研修会



清水 善男 (研修会運営委員会代表)

今年は静岡の担当で 6 月 9 日静岡駅前の一ツホール会館で行われた。会場も一つで、壁面一杯に尾形光琳の「紅白梅図屏風」で飾られ、また、シャンデリアもあるという立派な部屋で 74 名の参加を得て、たいへん盛会であった。

小山内先生については、多くの会員が承知はしていても直に話を聞く機会は少なかったのではないかと。先生の持論は特異的だが豊かな現場経験に裏打ちされて自信に満ちているだけに、昨今、叫ばれている「健康づくり」の難しさを思わないわけにはいかない。

調所先生は、職業性聴力障害についてその発生から補償まで、それぞれの問題点を整理して総説された。その詳細な講演資料集も貴重である。当地方会では、かつて 1961 年に熱海での研修会でこの問題を取上げたことがあったが、今もって多くの課題を抱えていることに騒音対策の難しさを痛感した。



伊藤先生には、現在緊急の課題の一つであるアルツハイマー病について、その発症のメカニズムに迫る研究の最先端をお話しいただいた。無念ながら私の理解には程遠かったが、興奮と緊張感溢れる学問の世界の雰囲気を感じることができた。

貴重な講演をいただいた先生方、ご協力いただいた静岡労働基準協会連合会ならびに会員諸兄姉にあらためてお礼を申し上げます。(詳細な講演記録ともいえる資料集の残部がありますので、ご希望の方はお申出て下さい。TEL0542-87-3007 清水)

健康づくりの基礎

小山内 博 (健康づくり研究会)



最近の疾病構造の変化によって、企業においても、積極的な健康づくりが一層重要な課題になってきている。

マウスのような実験動物では輪回し運動をすることで、自然に発生する肝腫瘍も発癌物質による肝腫瘍もその発生が著しく抑制されること、ゆっくり走り続けるような持久的トレーニングで高血圧と

加速度脈波計でみられる血液循環動態に改善がみとめられること、子宮筋腫、肺腫瘍、高血圧症、循環器疾患などの既往乃至は現症のある人達が加速度脈波計による検査で血液循環動態に問題があると思われる結果が得られること、動脈のアテローム変性のはじまりが子宮筋腫と同じような動脈壁の平滑筋細胞の増殖からであることなどから考えて、腫瘍も動脈硬化も血液循環の不十分さが基礎にあって、ゆっくり走り続ける持久的トレーニングでその発生をおくらせることが期待できる。しかし、それだけでは肩こりや腰痛のような運動器の障害は防ぐことができず上体そらしと背のばしのための腹

筋の運動のような体幹筋のトレーニングによって予防と治療に効果をあげることが期待される。また、増加傾向にあるアレルギー性疾患や慢性肝炎に対しては、冷水浴による改善例が多くなっており、今後の対応が期待される。食事のあとの活動は胃腸障害につながるため、仕事や運動の前の食事は摂らないか、できるだけひかえて、空腹時に適当な運動をして夜寝る前の食事を主体にすることで胃腸が守られる。

以上のことの組合せで、如何に長くではなく、如何に元気に生き続けるべきかを個人の社会的責任というか、周囲の人達に対する思いやりのある人生として考えて頂きたい。

これからの聴覚管理

調所 廣之 (関東労災病院耳鼻咽喉科)



近年工場の近代化に伴い、そこから発生する騒音も低減しつつある。しかし今なお多数の騒音性難聴は発生している。特に中小の工場での騒音は問題となっている。従来から騒音職場における聴覚管理についてはオーディオメトリーによる聴力検査が義務付けられて

いる。しかし具体的な管理指針は示されていない。最近労働省の専門家会議において騒音職場における聴覚管理の指針案が出された。この案はまだ公表されていないが、その内容は、①聴覚管理の目的 ②聴覚管理対象者 ③検査の種類 ④検査の方法 ⑤聴力検査室 ⑥検査結果の評価 ⑦評価に基づく措置からなっている。将来この案を下に聴覚管理が行なわれると考えられるので紹介した。

一方、すでに騒音性難聴となった者に対してはその騒音職場を退職する時に労災認定を受けることになる。騒音性難聴の労災認定の診断をみずから多数診ていると、そこには多くの問題が存在する。今回その問題点について紹介した。特に最近、騒音性難聴に関する訴訟が各地で発生している。この訴訟は労災制度の問題を争う行政訴訟と企業の聴覚管理責任を追及する民事訴訟に分けられる。いずれもチャンピオン裁判の性格を持っており、今後その判決の如何によっては更に多数の訴訟が全国で発生する可能性をはらんでいる。いずれにしても今後企業における聴覚管理責任は重くなり、われわれこの問題に関わる者にとってもその責任は一層重くなると考えられる。

アルツハイマー病の分子生物学的研究

伊東 平隆 (旭化成・ライフサイエンス総合研究所・生化学研究所)



アルツハイマー病は進行性の神経変性疾患で痴呆を伴うが、まだ原因も不明で治療法もない。近年、その特徴的な病理的变化である神経原線維変化や老人斑を手がかりに構成蛋白質の構造を決めたり、遺伝子発現様式を調べたりすることにより発症機構を解明する研究が進められている。

中でも老人斑はアルツハイマー病患者の大脳皮質に多量に存在し、その沈着過程が注目されている。老人斑の構成成分であるアミロイドβ蛋白質は約 40 のアミノ酸からなる難溶性のペプチドで、筆者らはその前駆体が 3 種類あること、中でも新規な APP751 および APP770 にはクニツ型蛋白質分解酵素阻害ペプチド配列が挿入されていることを発見した。染色体遺伝子の構造を解析したところ、1 個の遺伝子からオルタナティブ・スプライシングという機構により 3 種類の mRNA が生じていることがわかった。また、APP770 のコードしている酵素阻害ペプチドはトリプシンやキモトリプシンを強く阻

害することもわかった。まだ例数が少ないがアルツハイマー病患者の脳でAPP770遺伝子(mRNA)の発現が増大しているという結果も得られている。

以上の結果から、アルツハイマー病患者では酵素阻害活性の過剰

に伴う蛋白代謝の不調が異常分解物であるアミロイドβ蛋白の蓄積をもたらしている可能性が示唆される。アルツハイマー病の発症に蛋白分解酵素以外にも、複雑な要因の関与が推定されており、更に詳細な検討が必要である。

特集 3

産業医学研究の今日的課題と展望 ②

わが教室の振動障害研究のとりくみ

岩田 弘敏 (岐阜大・医・衛生)



振動障害は、きわめて社会医学的要素の強い疾病である。この障害の対策には、工具振動の軽減が重要であるが、工具を操作する時間の短縮はもっと重要である。これには雇用形態、賃金形態などが大いに影響するので、医学では解決できない面もある。

工具振動の軽減には、まず測定が基本である。これについては、すでに国際的に振動数で、重みづけた加速度値、更には4時間等価加速度値で測定することが進められている。しかし工具に直接ピックアップを固定しての測定では、工具操作姿勢、方向、把持力などで生体への伝搬を的確にとらえてはいえない。それらを加味した測定法の開発が期待される。振動工具が作動したときだけ、タイムが計測できる暴露計(万歩計のような)が開発されると、時間制御にはかなり有効ではないかと考えているところである。

鉛健診や有機溶剤健診では健康障害のみならず生体に対する「影響」のレベルで把握する検査項目が開発され、それらが改正案にもられている。振動健診にも同様の考え方で検討がなされようとしているが、振動影響を的確に把握する検査項目がない。本年4月、ウィーンで開催されたI S S A第3回振動に関する国際シンポジウム(これは振動対策が主で、医学的演題は少なかった)、同5月、金沢で開催された第5回国際手腕系振動会議でも、既知の容積脈波、皮膚温、血流量、毛細管像、振動覚等の知覚検査、神経伝導速度などでの検討について報告されていたが、それらをスクリーニング、予防的健診として、どのように用いるか今後の課題である。



なお、金沢での会議では、レイノー現象の発症機構、あるいは振動と自律神経機能や内分泌系との関係などの興味ある演題もあった。後者についてはストレッサーに対する適応反応の範疇なのか、振動による特異性であるのか、まだまだ議論の余地があるように感ずる。

私自身、10年間岐阜を離れ、更に数年間、産業保健から遠ざかっていたため、振動職場のフィールドを失っていた。しかし、まもなく、岐阜県下、一部の民有林チェーン取扱者の健診に参加でき、しかも当大学皮膚科との共同で強皮症に関する健診もできたので、それらについて検討しはじめています。同時に、レイノー現象の顕著な強皮症患者をはじめ、一次性レイノー現象有症者、振動性レイノー現象有症者と末梢循環機能の違いの有無も検討しつつある。そんな矢先、さく井作業、歯科技工士に振動障害らしきものがあるとの情報からそれについて、目下調査中である。

以上のごとき検討から、振動の量・反応関係を追求したいと考えている昨今である。

運動療育センターを中心とした健康づくり

小林 章雄 (愛知医大・衛生)



教室の産業医学の研究活動は、研究室のほか、メディカルクリニック(愛知医科大学分院)での職業性疾患相談外来、愛知医科大学運動療育センターでの健康づくりなどを通じておこなわれている。今回は、運動療育センターでの健康づくりを中心に紹介する。

運動療育センターは、新しい健康医学の確立をめざして、昭和62年1月15日に開設された。医学的検査室、トレーニングルーム、温水プール等を備え、医師、栄養士、トレーナー、理学療法士、看護婦をスタッフにもつ。衛生学教室は、当初からセンターの開設準備に参加し、基礎的データや資料の収集、システムの設計・運用段階での諸種の問題の解決に助力してきた。この中で、いくつかのテーマに取り組むこととなり、現在も健康づくりの基礎的な研究として続けられている。それらは、①日常生活における身体活動量の把握と評価に関する研究 ②栄養摂取状況の把握と評価方法に関する研究 ③全身持久性の評価方法(トレッドミル負荷)に関する研究 ④運動処方の一環としての水中運動に関する研究 ⑤身体運動による血圧上昇の日内変化などである。また、センター開設後は、いくつかの事業所からの相談に応じて、①事業所における「要健康管理者」に対する健康づくりプログラムの開発・適用と事後評価 ②腰痛職場等の作業環境改善および体力・筋力増強トレーニングの試みなどをおこなっている。また、これらの経験をふまえ、肥満、高脂血症、軽症高血圧を有する労働者を対象とした、健康づくり教室を、



運動療育センター内部

近々「開講、する運びとなった。こうした活動はいずれもセンターのスタッフ、事業所の保健スタッフとの共同で行われているものである。教室には、産業医をはじめ、体育学研究者や現場のトレーナー、栄養士や栄養学研究者、保健婦、学生など、さまざまな専門分野・職種の人々が入り出すようになり、運動療育センターをひとつの共同の実験場あるいは研修の場として活用しはじめています。たいへん刺激的で楽しいことである。研究的にも実践的にも大きな成果が得られることを確信している。

これまで、健康づくりのための基本的な情報は、諸外国での縦断的なPopulation Studyや、職域集団のCross Sectionalな検診データ等から得られることが多かった。今後は、よくデザインされた、多くのProspective Intervention Studyが職域で実施されることが望まれる。長期間にわたる観察と評価に耐えうる有利な条件(終身雇用の慣行等)が、わが国の産業の場には存在する。ここで得られる結果は、一事業所の利得をこえて、わが国の公衆衛生上きわめて有益な情報をもたらすものとなろう。

随 想

アフリカ産業看護職の政治力に脱帽

奥井 幸子 (三重大医療技術短期大学部)



3月にナイジェリアの首都ラゴスで開かれた ICOH の産業看護国際セミナーに参加してきた。日本かナイジェリアかと声がかかったが、我国は態勢が整わずアフリカになったという経緯があった。

セミナーのレポートは来年のモンリオールの産業看護分科会の会場で発売される予定なので、会の周辺の諸々について書くことにしたい。

我国で出来ないものを、経済的に苦しいアフリカがやり遂げた上に、アフリカ地域産業看護協会という国際組織を発足させた。ラゴス No.1 のホテルを会場に無料提供してもらうなど、随所に腕のすごさをみせた。

開会式には、保健大臣のみならず、大統領の右腕といわれる No.2 の Aikhomu 将軍も出席しスピーチをした。聴衆はのりやすく、偉い人でも云い間違えるとドッとわく。音楽が聞えてくると自然に体や足が動いていた。アフリカ以外からは、欧米 7 人、豪州 2 人、日本 1 人が参加した。

開会前日には保健大臣を訪問した。ナイジェリアは人口爆発の中心地で、一家庭当たり子供 7~8 人が平均で、農業が最大の産業であり、労働衛生どころでないという本音をもらされた。街で見る赤ん坊は小さくやせていて、肥満の子は 1 人も見られなかった。

会終了後、ナイジェリアのナースがわれわれを各大使館へ連れて行ってくれた。私も生れて初めて菊の御紋章の大使館へ行った。女 1 人でよく来たのと、医務官が館内のお宅で奥様手造りのおすしをご馳走してくださった。どさくさにまぎれてマラリヤ対策を忘れて来た私に、予防は手遅れだが発病したらむようにと薬をくださった。空港へは、医務官、書記官が送ってくださり、外交官バスでノーチエックで塔乗口へ直行してきた。世界のワースト 3 の空港で、係員に金をせびられることが多いそうである。新鮮で充実した体験を味わった旅行であった。

遙かな地

清水 弘之 (岐阜大・医・公衆衛生)



7 年間お世話になった東北大学を離れて、この 4 月より母校岐阜大学で仕事をさせていただくことになった。久しぶりの岐阜に慣れるには少し時間がかかりそうだが、30代半ばで移り住んだ東北地方もまさに異郷の地であった。

仙台に本社のある地方新聞「河北新報」の河北とは、白河の関を越せば一山百文と言われたことに由来するという。東北地方はそれほど辺境の地であった。辺境の地なるが故によくまとまっている。そして、中央を強く意識している。中央とはもちろん、東京のことである。

極端な言い方をすれば、東北の人にとって東京から先は一塊であり、たとえば、中部と関西の区別もい加減なものである。ある日、神戸宛の宅急便を出しに行ったら、受付の女性に「神戸は横浜の先でした。」と念をおされた。

岐阜への転勤が決ったある日、「そのうち訪ねて行くから」と励ましの言葉をくれた友人が、真顔で問うた言葉に仰天した。「ところで

岐阜に行くには、新幹線の新大阪より京都で降りた方が便利なんだろう。」

今でこそ、新庄、酒田、一関の位置関係は分るが、私は、仙台へ行くまで、東北地方のどこにある町か知らずにいた。少くとも私にとっては、東京より先は、東北地方であったわけである。

岐阜へ越して来て間もない頃、たまたま乗り合わせたタクシーの運転手が話しかけてきた。「そうですか、仙台からですか。青函トンネルができて北海道まですぐ行けるようになったでしょう。」——とんでもない話である。仙台・青森間は 500 km 以上もある。

それぞれが、遠く離れた地のことを、そしてそこに住む人々のことを誤解したままである。マスコミで世界の至る所が紹介され、近くなったとは言うけれど、やっぱり遠い。世界どころか、日本も広い。

老人保健施設

小森 義隆 (大同病院)



寝たきり老人等、介護を必要とする老人は全国で約 60 万人と推定され、21 世紀には 100 万人を越えると見込まれている。これら要介護老人の施設として、老人保健法に制度化が盛り込まれた「老人保健施設」が、昭和 63 年 4 月 1 日より本格実施され、本年 5 月末現在、

全国で 126 施設、愛知県内でも 5 施設が開所されている。

この「老人保健施設」は病院（老人病院）と家庭（特別養護老人ホーム）との中間に位置付けられ、老人の自立を支援し、その家庭への復帰を目指す施設であり、この施設を利用し得る対象者は、

- ① 70 才以上の病弱な寝たきり老人、又はこれに準ずる状態にある老人。
- ② 65 才以上、70 才未満の寝たきり等の状態にあって、市町村長より老人保健法医療受給者証の交付を受けた老人。
- ③ 70 才以上の日常生活の介護を必要とする痴呆性老人である。

ここでいう「病弱」とは、慢性疾患の病状安定期にあり、入院治療を必要としないが、医師の下での医学的管理を必要とし、リハビリ、看護・介護を必要とする状態を指している。又痴呆性老人は、入院治療を必要とする人は原則として対象とならず、痴呆のため日常生活の自立が困難で、その状態が継続すると認められる痴呆患者が対象となる。

「老人保健施設」によるサービスとしては、入所、ショート・ステイ、デイ・ケアの三通りがある。

入所サービスは、寝たきり老人等を一定期間以上あずかり、家庭復帰のためのリハビリ、療養に必要な看護、介護を中心とした医療ケアと日常生活サービスを提供する。

ショート・ステイは家庭で寝たきり等の老人を世話している家族が、病気、出産、旅行等で介護ができなくなった場合、原則として 14 日以内の短期間お世話する。

デイ・ケアは家庭介護を受けている老人に、家庭から施設に通所して頂き、食事、入浴、リハビリ等のサービスを提供する。

次期役員選挙のお知らせ

本年は、次期（平成 2 年～4 年）の本部役員ならびに地方会会長の選挙が行われます。有権者は会員で本年 7 月末までに本部会費納入が完了している者となっています。

10 月中に東海地方会選挙管理委員会より通知がお手許に届く予定ですので、あらかじめご承知の上、必ずご投票下さいますようお願いいたします。

話 題

生理人類学会第22回大会

坂本 弘 (三重大・医・衛生)



標記の学会の第22回大会を三重大学医学部衛生学教室坂本弘がお世話し、1989年5月18～20日の3日間、津市で開催した。

人類学はヒトの特性を明らかにすべく、形態、生理、生態・人口、生体機構、先史・考古、遺伝・生化、民族などの分野から研究が進められている学問である。そのうちの生理分野における研究は日本人類学会の中でおこなわれていた。その後、生理人類学研究会の時代を経て生理人類学会として独立した学会となり、今日に及んでいる。

生理人類学が対象とする領域はヒトと生活に関わるあらゆる分野に及んでおり、温熱生理、海中・高山・住居、食生活、スポーツ、労働生理、人間工学などの既存領域が関係する。また、進化、適応、個人差などはこの学問の固有の課題でもある。

第22回大会においては、現代のいちぢるしい環境の激変の中でこの分野に求められた課題が取り上げられ、一般演題の他に3つのシンポジウムが組織された。

シンポジウム(I)：親子

司会：滝川 寛 (三重大・医)

- 親子と遺伝……………石本 剛一 (三重大・医)
- 親子関係のはじまり……………比良田道晃 (国立榊原病院)
- 親子のきずな……………神谷 斎 (国立三重病院)
- 老親介護の諸相……………杉浦 静子 (三重県立看護短大)

シンポジウム(II)：ヒューマン・インターフェイス個人差

司会：佐藤方彦 (九州芸工大)

- ヒューマン・コンピュータインターラクション
 - における個人差……………渡辺 梯夫 (日本IBM)
- 機械装置の操作制御における個人差……………川北 和明 (九州芸工大)
- 建築環境におけるマン・マシン・インターフェイス
 - と個人差……………横山真太郎 (北大・工)
- 室内設定温のヒューマン・インターフェイス
 - に関する個人差……………栃原 裕 (公衆衛生院)
- ヒューマン・インターフェイスと交感神経反応
 - の個人差……………間野 忠明 (名大・環境医研)
- ヒューマン・インターフェイスの評価
 - 一人をはかる……………福場 良之 (広大・原爆放医研)

シンポジウム(III)：近未来に求められる人間の適応能

司会：菊池安行 (千葉大・工)

- 食環境変化への適応……………奥山 治美 (名市大・薬)
- 人間行動と適応……………久保田 競 (京大・霊長類研)
- 人間の不適応……………新宮 世三 (日南病院)
- 呼吸機能からみた適応……………安河内 朗 (産医研)
- 近代生活における適応……………肝付 邦憲 (近畿大・九州工)

シンポジウム I は産業医学にたづさわる者にとっても従業員のパーソナリティ理解、家族関係にもとづく負担を理解する上で有意義な内容が提示された。シンポジウム II は技術革新にさらされている現代産業人の労働負担を解析する上で直接かかわる課題であった。シンポジウム III では適応をとり上げ、環境と生体応答との本質を考える上での諸概念が展示された。

参会者は多領域からであり、まさに学術的であった。各専門領域において常用されている術語およびその背景概念が相互に理解され思考の幅を拡げることができた。応用科学の1つである産業医学にたづさわる者としては、社内の各職種間コミュニケーションを得るための素養をたかめる上でも資するところ大であったと思う。

本大会開催に対して産衛地方会より経済的援助をいただいた。紙面をかりて厚くお礼申し上げます。

「プライマリケアの考え方」について

服部於菟彦 (愛知県医師会理事)



平成元年 6 月 24 日、25 日、第 12 回日本プライマリケア学会が名古屋市で開催され、そして 25 日には藤田学園保健衛生大学島正吾教授の司会により産業保健とプライマリケアについてワークショップが開催された。

さてプライマリケアとは、その定義には現在の所確定されたものはないようであるためプライマリケアの今迄の経緯について考察し、それよりその輪郭を考えてみたいと思う。

1902 年、英国の Dowson 報告にその構想の原点があるといわれている。即ち当時のプライマリケアの特色は地域住民に密着した医療であり、一次医療と予防医学サービスを含めたものと考えられた。以後英国ではこの考えを基に NHS (National Health Service) の体制が出来、プライマリケアの担当医として G.P. 制度が出来たといわれている。

米国においては 1978 年当時、色々と定義があったのを、国立アカデミーが次の様にまとめた。即ちプライマリケアとは、

- ① 近接性 (Accessibility) として地理的、時間的に近接性があり、さらに経済的に効率よく、又気軽に受診出来るものとした。
- ② 包括性 (Comprehensiveness) として全科的全人的医療を目標とした。
- ③ 協調性 (Coordination) としては他の医療職及び行政を含む社会的医療資源との連携を重視し、
- ④ 継続性 (Continuity) として生涯に亙る健康を考え、
- ⑤ 責任性 (Accountability) として医療職の生涯教育、医療監査、そして患者及び家族に疾病の充分な説明をする事。

以上各項目を含む医療方法とした。一方我国では 1963 年、医学医療の発展は病人を診なく疾病のみ追求する風潮に対し、一部医家により「実地医家の会」が生れ全人医療の必要性がいわれ、1978 年にはこの会が基となりプライマリケア学会が生れた。

1982 年武見元日医会長はプライマリケアについて、社会生物としての人間を新しい医科学面から、全的に把握することにより個としての健康と疾病をとらえて展開する臨床活動こそプライマリケアの医科学というべきと思う。又プライマリケアは医科学的な人間把握を根幹として自然、社会、経済、文化等の環境との人間関係を正視しなければならない。環境との相互作用、適応のメカニズム、その中の個性が重視され、家庭、職域環境と健康疾病の関係はことに重要であると述べられた。1983 年、日医プライマリケア委員会では、疾病の予防、健康相談、健康教育、学校保健、地域医療システム、初期医療、在宅医療が活動領域であり、そして包括的、継続的、責任性、近接性であり全人医療を行うものであるとした。

第 11 回プライマリケア学会の入会案内にはプライマリケアとはあらゆる健康、疾病問題に対してプライマリに対応することであり、そしてプライマリとは初期、基本、本来、統合、常在、近接の意味をもち、ケアとは保健、医療、福祉に対応するものであると記載されている。本年度の学会には中村会頭は現代医療の自己批判から生れてきた医療概念の革新がプライマリケアであるとのべられた。

又産業保健は医療全体の中では勤労者のためのプライマリケアそのものであると土屋健三郎先生は述べられている。

そこで人間の健康を考えるときプレスローは人生を 10 期に分けた生涯健康監視計画を提唱しているが、各種職業と年齢と性をもった人間は各々の地域又は従事する社会環境と各々の経済又は行政的な特性及びその他種々な因子により特徴づけられる。そのため、それらの人々の健康を考えるには個人、集団、地域、国毎に又は年齢、性毎に、そして医科学的に又社会的、行政的、経済的等に対応する必要があると思う。

その健康監視に対して、今迄のべた経緯的観点から、その健康対策を考えるのが現在のプライマリケアでなかろうかと思っている。

第21回 日本医師会産業医学講習会

加藤 竹男 (中災防 中部センター)



6月22、23、24日の3日間名古屋市民会館中ホールで、富山・岐阜・愛知以西の受講者に頭書の講習会が開催された。

●受講者数及び構成など。(受講者名簿による)
愛知会場は定員500名を超え602人でメ切り参加を断ったという。(東京会場は定員700人でメ切り806人参加)地域別は表を参照されたい。産業医をしていない方は51.6%産衛会員は13.2%、今回「初」受講者は約90%であった。

●講習会の流れ。

紙面の関係で講師・座長の紹介は略すが、座長は島地方会長を除き愛知県医師会産業医部会幹事が携わり、その他の雑用と合わせて日医主催、県医世話人の形で進行された。

第1日は行政の方針及び法規の解説で、本省の方がそれぞれの相当分野を説明された。

第2・3日は「産業医に必要な学問的知識の解説」と題して馴染みの先生方の顔見世で、メンタルヘルスケア・疫学・産業中毒・粉じん障害・管理体制・作業環境・健康管理、教育の方法と講演が続いた。「講演時間に質疑討論を含みます」と看板にはあったが、そこは講師達は心得たもので、時間一杯超過もなくピタリと終り、一方座長も楽で、講師の紹介と終りに「質問紙で係に提出を」と言っておればお役ご免であった。内容ある話であったらしい。らしいとは無責任であるが、小使役で階段の昇降、講師との挨拶の連続で疲れはて、受講生として出来るだけ会場内で聞いたが、第1日と座長を務めた時以外は半分位は脳波がα波であった故である。

●感想

10数年前この講習を受けた。その時は、講師の話が高度で難解であり、専属産業医はとも角嘱託の先生方にそのような知識が必要なのかと疑問であった。教養としては別であろうが実務としては。今回は講師が行政を除き9名で、うち、産業医は2名の構成であったが大変まとまった判り易い講演であった。受講することは有益であったと報告したい。

ただ9時30分から昼食の1時間を除きトイレ休憩もなく、約6時間の講義で知力プラス体力測定とも思われた。勿論適当に場外に出られた

最後に単に数のみでなく、受講態度からも盛会であったと思う。初めての愛知への誘致で心配したが、世話人一同その甲斐あったと思われたであろう。特に服部於菟彦担当理事は誘致の原動力で県医事務局の全面協力を引き出した方だけに喜びは一汐と察せられた。

地域別受講者数(602名)

地域名	人員	地域名	人員
中部 (静岡含む)	196	九州・沖縄	126
近畿	191	その他 (秋田・宮城・岩手・千葉)	4
中国・四国	85		

学会研究会活動

第62回日本産業衛生学会・第46回日本産業医協議会

齋藤 勲 (愛知県衛生研究所)

4月28日朝、宿舎で目を覚ましカーテンを開けると、何と雨まじ

りの雪である。右手には雪の八甲田山がかすんで見える。まもなく5月というのに。「津軽海峡冬景色」の雰囲気が実感として理解出来た。冬物の服装でもないためとても寒く、旭労災の五藤先生のアイデアで下着を二枚重ね着したら少し暖かくなったが、それにしても大変な学会スタートであった。

学会は、東北の基幹都市らしく立派な建物の青森市文化会館、厚生年金会館で開催された。この産衛学会の特徴でもある自由集会は夜にも拘らず17テーマと非常に盛りたくさんあり、産衛学会の裾野の広さを感じられた。発表演題数は、健康管理・健康診断等61題、有機溶剤52題、金属等42題、粉塵・塵肺36題等総計339題の発表がなされた。主に参加した厚生年金会館の3会場での学会印象を述べてみたい。有機溶剤の会場では、尿中のメタノール、アセトンなどの溶剤及び代謝物の簡便、迅速な分析法の報告が多くあり、より精度の高いバイオロジカルモニタリングの発展が期待された。ヘキサン暴露作業者の尿中代謝物2,5-ヘキサジオンは、翌日昼食前の尿中濃度とヘキサン暴露濃度に高い相関が見られたとの報告があり、今秋の法律の改正ともあいまって各所で実際のデータが多く積み重ねられ、暴露低減の有用な手段となっていくであろう。有害ガス・有機物の会場では、今年も白蟻防除剤関連の発表が6題あり、有機リン剤クロロピリホスの暴露による血中コリンエステラーゼの急激な低下、尿中代謝物との関連、暴露を受けやすい状況のチェック等が各地で調査分析されていたが、今後実際の現場で働いている作業者が、より安全に作業できるための具体的な方法、提言が出来ればすばらしいと感じた。粉塵・塵肺の会場は、いつもながらの熱のこもった雰囲気ではあったが、会場が参加者のわりには狭くて机も無いため、何となく設営ミスのように感じられた。他には、磁場によって3種類の発癌物質の変異原性が増強又は抑制され、磁場強度の変化にも対応していたとの発表があり、将来的には興味ある問題と思われた。

青森は、冬の辛さを我慢すれば(?)静かに暮せるところだと感じたが、街のあちこちにある東北新幹線を青森まで! というスローガンを見ると青森県の置かれている厳しさも感じられた。

日本産業衛生学会特別研修会

渡辺美寿津 (三菱名古屋病院)

特別研修会は4月27日、まだ肌寒い青森で開催された。テーマは「新しい視点での労働衛生管理のあり方を考える」で、三管理(健康管理、作業管理、作業環境管理)と、それらを横糸で結んだ精神保健管理の現状と課題について、各分野毎に著明な先生方の興味深い話が展開された。

健康管理では、衛生管理体制及び産業医の職務の他、安衛法改正に伴う項目の実際の現場での取り入れ方、Total healthの必要性及び概念等が論じられた。精神保健管理では健やかさを重視する中で手法としてのactive listening——気付き、声をかけ、耳を傾ける——の重要性を強調されていたことが強く印象に残っている。作業管理では、多岐にわたり流動的なため、普遍性に乏しく他管理より未熟であると話されたが、今後の方向性が確固として示された。環境管理では、中小企業の実態が報告され、安衛法改正を含めて、どう進めてゆくかという全視野的な立場にたった手法が紹介された。

以上、概略を私なりにまとめてみたが、改めて、その豊富な内容に驚いている。産業医学に足を踏み入れたのが、わずか1年半前の私にとって、今回の産衛学会及び研修会は初めての経験であり、各分野の統括的な話が聞けたことは、非常に貴重なことであった。

また、今大きく変貌を遂げようとしている産業医学を大きな視野で捉え、発展させてゆこうという意気込みも、充実した様に思っている。

第29回全国産業健康管理研究協議会

武ノ上 庸 (東亜合成)

7月1日、東京都の全共連ビルで開催され、ホール一杯の出席者で女性の産業看護職の参加も多かった。

主題は「やわらかい健康管理」—「画一性からの脱皮をめざして」であり、梅沢会長の挨拶、藤井主幹の主題総説も、社会情勢や健康意識の変化に対応したソフトな健康管理をと述べられた。

午前中は例年通りアンケート調査の集計結果に基づいた疾病動向の報告があり、午後からはパネルディスカッション「画一性からの脱皮をめざして」で、関東、関西、東海、九州の産業医、保健婦がそれぞれの立場からの健康管理、保健指導について発表と意見を述べられた。

続いて、庄中、高田、埋忠先生の「健康管理をやわらかくするには」の鼎談が行われた。管理する側に便利な画一的な健康管理を改めて、管理される側に役立つ健康管理、「お役に立つことがあれば援助しますよ」という態度で、広い視野に立った融通性と弾力性のある健康管理、高齢化とともに健康も人生、病氣も人生、求める健康度を明らかにして援助する、生活が楽しく、よくなる自主的参加のできるアドバイスが必要となるし、企業ムードに合った一味違う健康づくり、健康管理が必要であろう等々、現場の産業医、産業看護職にとっては、これからの健康管理のあり方の方向示唆を与えられた感であった。

新 刊 紹 介

坂本弘著「わかりやすいメンタルヘルス——産業現場での活かし方」

中川 祐子 (東芝三重)

今年5月に初めてこの本を手にし、まだ充分読んでいないのでうまく御紹介できませんが御了承下さい。まず初めに、我社は毎年管理監督者に対し「リスナー教育」を行っています。以前は月刊、「労働衛生」(中災防)より抜粋・コピーし、資料として使用しましたが、今回からこの本をテキストとして全員に購入させました。つまり、職場のメンタルヘルスのテキストにも活用でき、さらに担当者のレベルアップの為にテキストにもなるという2つの特徴を持った本です。

内容として……“今なぜメンタルヘルスケアが必要なのか”日本の今おかれている状況から解説され、さらに従来の臓器中心の健康管理を反省し保健担当者としての意識変革を求めています。第2章“メンタルヘルスとは何か”第3章は“メンタルヘルスの事例として10例あげ、それらの事例に対する解説・コメントが詳しく書かれています。第4章は“カウンセリングおよびリスニング”としてカウンセリングの基本(意味・技法・心構え・事例)が示され、第5章は“カウンセリングを深めるため”実際に現場でカウンセリングされている担当者に対するさらに深い取組みが書かれています。ここではむずかしい文章でなく対話方式に書かれ、非常に読みやすく解りやすい内容です。

最後は労働安全衛生法特にTHPについて解説されています。以上、メンタルヘルスの一連の内容が解りやすく書かれ、どなたでも役立つこと確実です!

(A 5 264頁 1600円 中災防)

島正吾編「アスベストに挑む三管理」

柏木 時彦 (柏木事務所)

本書は、月刊誌「労働衛生」が「アスベストに挑む三管理」を主題として、昭和63年1月から昭和63年12月まで連載されたものに加筆されたものです。

執筆者は、この分野における第一線研究者で、医学情報については、島正吾氏、横山邦彦氏、森永謙二氏、相沢好治氏、建築業を中心にした産業現場の実態は、久永直見氏、酒井潔氏、アスベストの鉱物学は、神山宣彦氏、アスベストの測定と評価は、本間克典氏、解体工事等のばくろ防止対策と最近の動きについては、三上辰雄氏、高木隆雄氏です。

多方面から精力的な調査研究をまとめ、アスベストをめぐる今日の問題点と、問題解決のための社会科学的、医学的なあり方をめぐって、密度の高い系統的な論述が行われています。編者は島正吾氏です。

ただ、企業からの産業現場の実態と防止対策の現状、石綿にかわる代替材の開発状況の報告が欠落しているのが気になります。

いまや一般の生活環境までアスベスト汚染が広がっている状況にあって、立ち遅れているアスベスト問題の早期解明に挑む研究者の真剣な姿勢が伝ってくる本です。

(A 5 200頁 900円 中災防)

H・デュピイ/G・シレット著
松本忠雄他訳「全身振動の生体反応」

榎原 久孝 (名大・医・公衛)

著者の一人デュピイ博士は、振動について長年研究してこられた振動研究の第一人者である。

この本の中には、急性影響として、脊柱・内臓器官・眼など人体各部位への振動伝搬および人体各部位の振動応答、また心臓—循環系機能、感覚機能、自律神経系などへの影響が紹介されている。慢性影響として、脊柱疾患、消化器系疾患について、トラクター運転手、トラック・バス運転手など各職種ごとの疫学データが詳しく述べられている。

さらに予防のための工学的的方法、暴露時間の規制、暴露ガイドラインなどについて書かれている。結論として、「“暴露”曲線(V1D2057またはISO2623)を超過する振動刺激に長期間暴露することは、健康への危険性、とくに脊柱への危険の増加を招くという結論は必然的に導かれる。それ故に、個人保護のために、個人によって工学的的方法によって、労働時間の編成によって、また産業医学的にとられるどんな予防的方法も—すべて重要である。」と述べられている。

現代社会は、飛行機、自動車、列車、船など輸送機の発達にともない、全身振動に暴露される人が増加し、国際的に全身振動の人体影響について関心が高まっている。日本でもフォークリフト作業者について問題にされたことがある。

この本は、専門家の眼を通して、全身振動の研究の到達点が幅広くまとめられており、全身振動の影響を考える際にも、職場での対策を考える際にも有用である。

(A 5 208頁 4635円 名大出版会)



これからの諸行事予定

- 平成元年度東海地方会学会 (会長：坂本 弘)
 - 日時：元年11月17日(金) 場所：四日市農協会館(近鉄四日市駅東)
 - 特別講演：「外からみた産業医学」井上 俊(名大名誉教授)
 - シンポジウムⅠ：「健康測定の方法と評価手法」
 - 司会：石川 昭(三菱化成・三重)
 - (1)健康診断から健康測定へ 清水善男(三菱電機・静岡)
 - (2)若返りへの期待と限界 橋本哲明(東芝・三重)
 - (3)健康測定におけるマス・スクリーニングの問題点 橋本郁夫(岐阜県労働基準協会連合会)
 - (4)職場集団の健康指標と健康確保 入谷辰男(トヨタ自動車)
 - シンポジウムⅡ：「自助力への働きかけ技術開発の現状」
 - 司会：杉浦静子(三重県立看護短大)
 - (1)気構えの把握 奥井幸子(三重大・医療技術短大)
 - (2)総合化する姿勢 荻田佳子(東海銀行)
 - (3)他分野からの技術移入 和田晴美(名鉄)

- 第8回 作業負担研究会
 - 期日：平成元年10月6日(金) 場所：鶴友会館(名大)
 - テーマ：「視覚負担について」
- 第47回 日本産業医協議会
 - 期日：平成元年9月2日(日) 場所：福岡県医師会
 - 主題：「若者の健康習慣を助ける」
- 第29回 日本労働衛生工学学会
 - 期日：平成元年11月16日(木)～17日(金)
 - 場所：東京虎ノ門パストラル(東京農林年金会館)
 - シンポジウム「21世紀における4大有害要因への対応」
- 日本健康科学学会第5回学術大会(会長：島正吾)
 - 日時：平成元年11月10日(金)・11日(土)
 - 場所：愛知厚生年金会館(名古屋市)
 - 会長講演：「生物学的モニタリングと健康度評価」島 正吾
 - 招請講演：「健康設計に対する疫学情報の利用」柳川 洋(自治医大)
 - シンポジウムⅠ：「市町村における健康づくり対策」
 - 座長：森田 稔(中京女子大)・久我 正(愛知県衛生部)
 - シンポジウムⅡ：「肥満と健康」
 - 座長：細谷憲政(国際学院埼玉短大)
- 第1回 産業神経・行動学研究会
 - 日時：平成元年12月3日(日) 場所：鶴友会館(名大)
 - 特別講演：神経障害の免疫生化学的アプローチ、加藤兼房(愛知県コロニー) 事務局：名大・医・衛生

会員の消息

(平成元年 3 月 29 日～ 6 月 21 日)

新入会員29名

- 〔愛知〕 森部智子(藤沢薬品名古屋)、菅原悦子(中部労災病院)、巷あさみ(岡谷鋼機)、中村清範(中部労災病院)、丹村敏則(NTT名古屋)、大野晶子(名大分院放射線)、伊藤真由美(JR東海)、柴垣恵美(JR東海)、山口慶子(JR東海)、四方 修(愛知厚生連長久手健診センター)、川本 博(三河保健予防協会)、荻須泰(三河保健予防協会)、青山典裕(全国土建国保中部健康管理センター)、河辺昌信(NTT名古屋)、佐藤昭雄(さとう内科)、小池光正(ブラザー病院)、中村一也(中村回生院)、瀬戸 明(豊田地域医療センター)、早川ア井(愛治病院)、小栗正光(日軽名古屋)、鳥井義夫(名古屋第二赤)、
- 〔岐阜〕 山田隆司(久瀬村診療所)
- 〔三重〕 小西泰元(NTT鈴鹿健康管理所)
- 〔静岡〕 古田隆久(浜松労災病院)、月岡幸雄(日軽金蒲原)、相川

英雄(小糸製作所静岡)、江口つや子(聖隷三方原)、鈴木典子(浜松医大第二内科)

転入会員 2 名

奥井幸子(東京→三重)、長瀬十一太(静岡→三重)

転出会員 6 名

高亀良治(愛知→広島)、三木知子(愛知→岡山)、三木芳夫(愛知→岡山)、伊藤怜子(愛知→神奈川)、吉川 博(岐阜→神奈川)、長瀬十一太(静岡→三重)

退会会員 9 名

三木一貫(愛知)、日高恵一(愛知)、松下 寛(静岡)、鳥海久雄(愛知)、今村貴和(愛知)、滝 剣朗(愛知)、宮下 武(愛知)、大口弘和(愛知)

死亡会員 2 名

大島秀彦(愛知)、近藤慶一郎(愛知)

会員総数496名 愛知343名 静岡65名 三重37名 岐阜51名

理 事 会

理 事 会

- 総 会 元年 6 月 9 日(金) クーポール会館(静岡市)
 - ① 昭和63年度事業報告 ② 昭和63年度会計報告
 - ③ 平成元年度事業計画 ④ 平成元年度予算案
- 第1回理事会 元年 5 月 9 日(火) 大同特殊鋼本社 出席者21名
 - A、報告事項 本部及び事務局からの連絡事項(島) 地方会ニュース(第15号)の発行(森川)
 - B、協議事項 昭和63年度事業報告(案)、会計報告(吉田) 平成元年度事業計画・平成元年度予算案(吉田) 平成元年度東海地方会総会・研修会(橋本)
- 第2回理事会 元年 7 月 11 日(火) 大同特殊鋼本社 出席者27名
 - A、報告事項 本部及び事務局からの連絡事項(島) 平成元年度東海地方会総会・研修会(清水)
 - B、協議事項 平成元年度東海地方会学会(島) 東海地方会誌の発刊(森川) 地方会役員の改選(島) 第8回作業負担研究会(入谷) 日本産業衛生学会60周年記念事業(島)

編集後記

全国各地方会からニュース発行五周年を記念してご祝辞と併せて地方会活動の現況を紹介頂きました。各地方ともに積極的に地方会活動を展開されて心強く拝見致しました。ことに、近隣地方会との連携が密にできたらと痛感し、6年目に入るニュースには、より広域的な問題が欲しいと考えます。5年間15号までの記録の索引を見直しますと、時代の変化、産業の変化がそのままニュースとなり、その時々記録に私共の考え方が生きていると感慨深く反省させられます。

会員諸氏の日常体験される諸々の問題を積極的に紹介することによって、より充実したニュースに願っております。ご投稿を心よりお待ちしております。(森川利彦)

次回発行 平成2年1月1日

編集責任者 岩井 淳(三菱名古屋病院)

編集委員(五十音順)

- 柏木時彦(柏木事務所) 加藤保夫(岐阜県産業保健センター)
- 五藤雅博(旭労災病院) 後藤 猛(ヤマハ健康管理センター)
- 小森義隆(大同病院) 滝川 寛(三重大学)
- 竹内康浩(名古屋大学) 久永直見(名古屋大学)
- 森川利彦(三菱電機) 吉田 勉(藤田学園保健衛生大学)

祝 日本産業衛生学会創立60周年

地方会ニュース索引

【第1号(昭59.9)～第15号(平1.5)】

○第1号(59.9)

地方会ニュース発刊にあたって:

産業活動の告知版として(島 正吾)

新しい息吹と大きな前進を(皿井 進)

話題:42物質の管理濃度決まる一労働省、作業環境管理要領を通達一(柏木時彦)

会員の声:研修会1泊コースを(T・Y生)

若い力を導入しよう(H生)

○第2号(60.1)

新春を迎えるにあたって(島 正吾)

新春随想:西国の寺々(加納達夫)・老化防止(橋本哲明)

ハイビスカス(井上 俊)・海外医療巡回(鎌田 隆)

新春座談会:変貌する労働現場と産業衛生一地方会活動に望むもの一(司会:坂本 弘)

出席者:岩井 淳・宇野鉄次・尾添 博・柏木時彦・

河合 信・木村たつ子・斎藤俊二・久永直見・

森川利彦

話題:トリクロロエチレンと腸管囊腫腫脹(久永直見)

VDT問題についての動き(飯田英男)

随筆:合弁会社と原価計算(錫村 満)

行政だより:安全衛生教育推進要綱が策定される(尾添 博)

紹介します:衛生管理業務女子研究会のあゆみ(大原武子)

会員の声:健康ブーム(清水善男)

産業衛生学会東海地方学会に参加して(S・H生)

○第3号(60.5)

次の世代へ、手を携えて(加藤竹男)

産業医・産業保健婦・産業看護婦及び衛生管理担当者のための研修会(岩井 淳・村山尚子・袴田章二)

随想:半世紀前のこと(横山恒矢)・流れのなかで(杉浦静子)

会員の受賞・祝賀:皿井進先生「久保田賞」受賞される

錫村満著「技術者と産業医」の出版記念祝賀

会開かる

話題:腓骨神経麻痺(入谷辰男)

セロソルブ類による精巢の萎縮(竹内康浩)

行政だより:港湾作業に際し粉じん則等が改正される(尾添 博)

会員の声:産業医1年生(岡本祥成)

元禄時代の精神障害(松本光雄)

○第4号(60.9)

知恵と知識(吉川 博)

特集:医師と企業内管理活動一阿久津慎先生に聞く一(横山恒矢

・岩井 淳・森川利彦)

昭和60年度日本産業衛生学会東海地方会研修会

(清水善男・小坂 稔・榎本 真・豊島日出夫)

話題:職業性黒皮症(早川律子)

給食調理員の「指曲がり症」について(小野雄一郎)

随想:新生NTTの企業内1年生として(伊藤怜子)

和歌山での10年を過ぎて(岩田弘敏)

会員の声:Smoking(笹野英子)

○第5号(61.1)

新春を迎えて(島 正吾)

新春随想:青山光子・石川 昭・宇野鉄次・柏木正雄・坂本 弘

・武ノ上庸・斎藤俊二・宮田昭吾

ルポルタージュ:ファインセラミックス産業一華やかな業界を支

える熾烈な技術競争(柏木時彦・加藤保夫・久

永直見)

東海地方会史編纂を終えて(井上 俊)

話題:メンタルヘルススライド作戦一(森川利彦)

じん肺と肺がん(五藤雅博)

新春の抱負:西村典子・服部保次

○第6号(61.5)

老産業医の生き甲斐(出原 汎)

第2回産業医・産業保健婦・産業看護婦及び衛生管理担当者のため

の研修会(岩井 淳・光永一郎・吉田好枝・加藤保夫)

随想:井田龍三

学会の活性化(竹内康浩)

話題:中小企業と環境管理(斎藤俊二)

ロケット打ち上げと安全衛生管理(岩井 淳)

会員の声:世の中の変わりとともに考える(服部啓一)

行政だより:昭和61年度の労働衛生行政について(宮宅英夫)

○第7号(61.9)

近況雑感(吉田克巳)

特集:「職業病の考えかた」について産業労働衛生関連法制度検

討委員会の討論経過の紹介(山田信也)

昭和61年度日本産業衛生学会東海地方会研修会

(小森義隆・花井喜一郎・蓑原美奈恵)

随想:これからの労働衛生(奥谷博俊)・雑感(網元美奈子)

話題:レジオネラ症(藪内英子)

職場の喫煙対策の推進について(佐久嶋順平)

会員の声:衛研と産業保健(河合 信)

労働環境と健康問題(吉田 勉)

新刊紹介:環境改善事例集

○第8号(62.1)

謹賀新年(島 正吾)

特集:東海の産業の歩みと21世紀への展望一労働衛生はどう変わるか一

鉄鋼業

(小篠 築)・化学工業 (石川 昭)

電機産業 (鈴木良一)・自動車産業 (入谷辰男)

窯業 (加藤竹男)・金融業 (飯田英男)

通信業 (伊藤怜子)・中小企業 (斎藤俊二)

昭和61年度東海地方学会を振り返って(松本忠雄)

話題:M-5事業計画と環境アセスメント(松本 清)

新春随想:1987年の始めに思う(上野清敏)

新春随想(平井 智)・年の始めに思う(牧角 淳)

会員の訃報：横山恒矢先生の思い出（皿井 進）
大谷先生のおもいで（袴田章二）
宮田昭吾先生追悼記（牧野茂徳）

○第9号 (62.5)

化石人間（錫村 満）
特集：(続)東海の産業の歩みと21世紀への展望—労働衛生はどう変わるか—
電力供給業（出原 汎）・ガス供給業（松本光雄）
特別寄稿：21世紀に向かう日本経済（水谷研治）

第3回産業医・産業保健婦・産業看護婦及び衛生管理担当者のための研修会：

はじめに（鈴木良一）
特別講演：健康管理における検査値の見方、考えかた（河合 信）
特別講演：突然死をめぐって（平田幸夫）
特別講演：作業負担と健康への影響（小野雄一郎）
研修会に参加して（津田佳彦）

話題：米国で開催されたアスベスト影響排除（Asbestos Abatement World Congress）に関する世界総会（松原 功）
行政だより：昭和62年度労働衛生行政について（宮宅英夫）

○第10号 (62.9)

健康管理の実践活動（井田龍三）
特集：産業医問題を考える

木下勝也・清水善男・市山 純・大沢正義・柏木正雄・川島光春・近藤正人・柏木時彦・五藤雅博・山元正義・鈴木 隆・立川壮一・岩田国夫

昭和62年日本産業衛生学会東海地方会研修会（花井喜一郎）
話題：日本医師会指定による瀬戸旭医師会が行っている「産業医研修を中心とする産業保健活動モデル事業」について（吉野貞尚）

随想：「国際居住年」によせて（三谷一憲）
会員の声：産業医のむつきさ（牧野宣一）

○第11号 (63.1)

謹賀新年（島 正吾）

特集：おしよせる職場の中高年化、それにどう対処するか
トヨタ自動車の場合（入谷辰男）・三菱電機の場合（森川利彦）
名古屋鉄道の場合（鷲野昌夫）・川崎製鉄の場合（牧野宣一）
「基調講演1」をきいて（岩井 淳）
「基調講演2」について（飯田英男）

パネルディスカッションの印象記（石川 昭）
新春随想：新春随想（岩田弘敏）・若者（袴田章二）
イギリスからおめでとうございます（松本忠雄）
アメリカ雑感（宮尾 克）・手配（医）師（加藤保夫）
窯業界における産業衛生の初夢（山元正義）

話題：最近の AIDS について（斎藤征夫）
吹き付け石綿による室内空気汚染（酒井 潔）
会員の声：“働かざるもの食うべからず”（加藤 力）

○第12号 (63.5)

新世代の産業医像を自らの手で（井上 俊）
特集：労働時間を考える—労基法改正に当たって—
労働時間と健康な生活（山田信也）
労働時間を考える（伊藤英夫）

第4回産業医・産業保健婦・産業看護婦及び衛生管理担当者のための研修会：

脳卒中をめぐる最近の話題—予防からリハビリまで—（河村計子）
職場におけるハンディキャップワーカーのケアについて（石丸ちづる）

錫村先生を惜しむ：彼—錫村満君にささぐ—（加納達夫）
錫村先生の思い出（加藤竹男）
話題：有機溶剤中毒と後天性色素異常（竹内康浩）
シロアリ防除作業者の健康問題（五藤雅博）
随想：禁煙・分煙と衛生管理（佐久嶋順平）
予想外の結果（伊藤直則）・随想（真鍋 貴）

○第13号 (63.9)

管理能力のある産業医へ（柏木正雄）
特集：各県医師会の産業医活動
愛知県医師会産業医部会活動について（服部於菟彦）
岐阜県医師会における産業医活動の状況（佐々木千早）
三重県産業医活動について（野村新爾）
静岡県医師会の産業保健活動について（鈴木勝彦）
昭和63年度日本産業衛生学会東海地方会研修会：
(杉浦静子・滝川 寛)
随想：歯科雑感（大口盛松）・堀川端歳時記（加茂裕子）
産業医として（住吉勝也）
特別寄稿：私の産業医像（河合正武）
話題：零細小鉱山離職者の20年後（加納達夫）

○第14号 (元.1)

恭賀新年（島 正吾）
特集1：産業医のみた海外の労働現場
海外生活にフィットするために（鎌田 隆）
手綱と絆（伊藤英夫）・米国市場への布石（久永直見）
ライフワークとしての海外（森川利彦）
特集2：労働安全衛生法改正をめぐって
法改正のポイント（柏木時彦）
健康確保施策における運動の実際（加藤幸久）
新春随想：3つの軸（梅沢 勉）・新春雑感（木下勝也）
産業医雑感（工藤つや）・新春に思う（牧野茂徳）
話題：鉛中毒と誤診された一症例（五藤雅博）
書評：吉野貞尚著「じん肺読本—じん肺診療27年の記録」（加藤 晃）

○第15号 (元.5)

衛生学40年（青山光子）
特集1：第5回産業医・産業保健婦・産業看護婦及び衛生管理担当者のための研修会
特別講演：がんをめぐる最近の動向—とくに1次予防、2次予防について（富永祐民）
講演：健康の保持増進対策と具体的な運動処方（加藤幸久）
講演：職場における面接技法のあり方について（杉浦静子）
特集2：産業医学研究の今日的課題と展望①
レアメタルによる生体免疫毒性（吉田 勉）
わが教室とメンタルヘルス（滝川 寛）
特別寄稿：岐阜滞在10年を振り返って（吉川 博）
瀬戸旭医師会が実施した産業医研修を中心とする産業保健モデル事業（吉野貞尚）
報告：我が社の健康づくり「ヘルスアップヤマハ運動」（那須孝明）
話題：肥満は成人病予備軍（堀田 饒）
大島秀彦先生を惜しむ：故大島秀彦先生を偲ぶ（小林章雄）
大島秀彦先生を追悼して（吉田克巳）